



"The Island of Ceylon is a small universe; it contains as many variations of culture, scenery and climate as some countries a dozen times its size."

Arthur C. Clarke, 1977. *The View from Serendip*

「セイロン島は小さな宇宙です。この島には何十倍もの大きさの国々が抱える程の、様々な文化や風景、気候があります。」

アーサー・C・クラーク





「中央高原もティー・ゾーンにくると、峰あり、谷あり、急峻な断崖もあれば、二折れ三折れして落下する白泡の滝もあつたりして、ほんとにスコットランドあたりのハイランド風景そっくりである。昔ここへ入植したスコットランド人たちが故郷懐かしさのあまり自分の開拓した茶園に“ローモンド”とか“アプトン”などという名前をつけた気持がよくわかる。彼らはそのうえ故国からはるばるマスをはこんできてこの溪流に放流したり、谷の盆地に芝生を植えてラグビーやクロケットをやったりしたらしいが、こうまでそっくりの風景ではそれ以外の何も考えられないといってよろしいほどである。この起伏に富んだ風景を見わたすかぎり、そしてどこまでいってもみたしているのが、整然とした茶、茶、茶の畑である。」
開高健『オーパ、オーパ!! スリランカ篇 宝石の歌』(1987)

世界のお茶専門店 ルピシア
お茶の国を旅する

光の島、セイロン

*Dedicated to the great tea blender
Mr. Joseph Sinnah.*

目次

インド洋に浮かぶ真珠 8

セイロン紅茶について 16

標高による産地の区分とクオリティーシーズン 23

紅茶の作り方 24

紅茶の等級 28

七つの紅茶産地 31

ヌワラエリヤ 34 / ウバ 38 / ウダブッセラワ 42 / デインブーラ 44

キャンディ 46 / サバラガムワ 50 / ルフナ 53

テイスティングとオークション 56

いれ方の目安 59

もっと知りたいスリランカ 60

インド洋に浮かぶ真珠

The Pearl of the Indian Ocean



面積: 6万 5,610km² (北海道の約 0.8 倍)

人口: 約 2,218 万人 (2022 年: スリランカ中央銀行)

首都: スリ・ジャヤワルダナプラ・コッテ

民族: シンハラ人 (74.9%)、タミル人 (15.3%)、

スリランカ・ムーア人 (9.3%) (一部地域を除く値)

外務省ホームページ・スリランカ基礎データより

インドの南、わずか 30km あまりのポーク海峡の小島を挟んで隣接し“インド洋に浮かぶ真珠”と称えられる美しい島国。

シンハラ語で“光り輝く島”の意味をもつスリランカ。

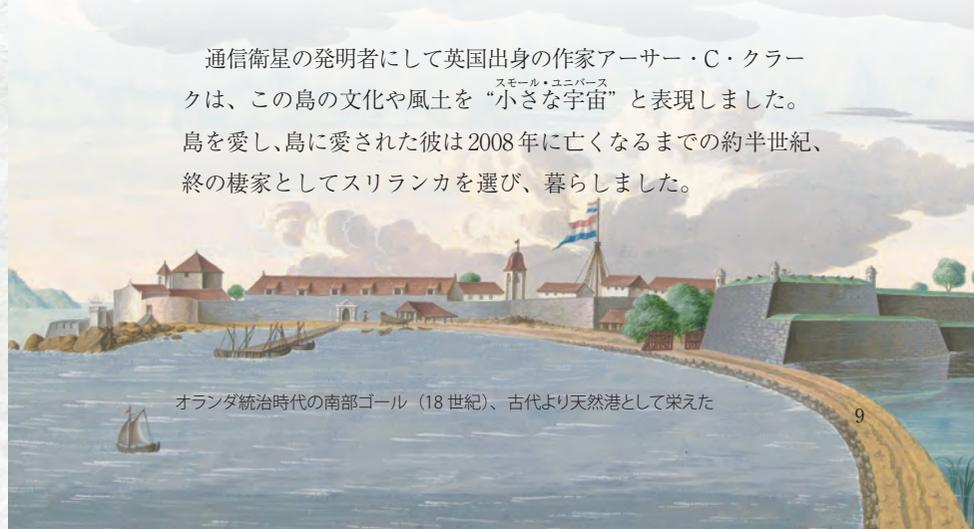
“^{ライオン}獅子の子孫”シンハラ民族に由来する旧国名セイロンから、1972 年の独立をきっかけに改名しましたが、現在もスリランカの紅茶は「セイロン」の呼び名で親しまれています。

面積は北海道の約 0.8 倍。熱帯の島の海岸線にはヤシの木が茂り、田は水をたたえ、背後には自然のままのジャングルが広がる。緑あふれる環境は人々を魅了し惹きつけています。

正確な年代には諸説ありますが、約 3 万 8000 年前前のバランゴダ人の人類遺跡に始まり、森に暮らす原住民ヴェッダ人、インドから南下したタミル人、古代王朝や仏教文化の礎を築いたシンハラ人、沿岸部で商業を営むイスラム系のムーア人、中国からの貿易船、そして 16 世紀以降、名産品のシナモンなどのスパイスや真珠、象牙、宝石を求めて集まったポルトガル人、オランダ人、英国人の子孫など、様々な人種や文化が重なり混ざったパッチワークのような島。

通信衛星の発明者にして英国出身の作家アーサー・C・クラークは、この島の文化や風土を“^{スモール・ユニバース}小さな宇宙”と表現しました。

島を愛し、島に愛された彼は 2008 年に亡くなるまでの約半世紀、終の棲家としてスリランカを選び、暮らしました。



オランダ統治時代の南部ゴール (18 世紀)、古代より天然港として栄えた



名産品の宝石
スリランカの記念切手より

水晶の舍利箱（3～4世紀）と
座禅を組む仏陀像（16世紀）
メトロポリタン美術館蔵



宝石の歴史を語る上で、スリランカほど重要な場所はこの世界にほとんどありません。ルビー、ガーネット、スピネル、ムーンストーン……紀元前10世紀ヘブライ王国のソロモン王の時代から、この島は希少な天然石の産地として知られていました。英国王室に継承されたブルーサファイアなど、国際的に有名な宝石も数多く産出しています。

仏教の聖地としての重要性も忘れてはいけません。

インドから紀元前3世紀に伝来したスリランカの仏教は、出家を伴う上座部仏教じょうぶぶつきょうといわれる古式を今に伝えるもの。現在も島の7割以上を占めるシンハラ人を中心にあつく信仰されています。

また古代ギリシャ、ローマの時代から、シナモンをはじめとするスリランカ産の香辛料は、各地で珍重されていました。標高差のある多様な土壌と気候を持つ熱帯の島国は、一つの場所で多くの種類の香辛料の栽培や採取が可能だという貿易上の利点もあり、古くから香辛料の交易が活発に行われていたのです。



スリランカではナツメグ、クローブ、胡椒、シナモンなど様々なスパイスを栽培している
スリランカの記念切手より



宇宙からスリランカを眺めたとき、隣接するインドの大地と比較して、エメラルドグリーン^①の緑地の美しさが目立ちます（P2参照）。

スリランカでは紀元前5世紀頃から歴代の王朝によって、雨期の雨水などを利用した、ため池や水路など灌漑^{かんがい}の文化を発展させてきました。そのことは、島の半分以上を占める乾燥地域（ドライゾーン）の緑地の保全や、計画的な農作物の収穫などの利益をもたらしました。

特に島の中央から南西にかけて広がる湿潤地域（ウェットゾーン）に点在する棚田による稲作風景は、島の高度な治水技術の伝統を今に伝える、大変に美しく合理的なもの。

この優れた治水に基づく農作物の栽培技術は、16世紀以降のコーヒーや紅茶などのプランテーション（単一作物の大量栽培）の成功の土台にもなりました。



スリランカのコーヒー栽培は、18世紀半ば、オランダ領セイロン時代に試験的に始まりました。やがて、19世紀の英国統治時代に大規模な産業として発展、世界最大規模の産地となります。しかし、主にさび病の影響で継続が困難となり、コーヒー事業は、主に低地の天然ゴムと高地の紅茶栽培に切り替わっていきました。



P12下：美しく整備された棚田の風景（19世紀後半）